

古典に表れたものの見方・考え方を知り,その世界に親しむ試み ～ 「進化する語り合い」で「おくのほそ道」の世界に迫る ～

秋田市立将軍野中学校

伊藤 香

問題の所在と研究の目的

「竹取物語」「平家物語」そして「おくのほそ道」等,古典は古人のものの見方・考え方の宝庫である。中央教育審議会答申では,我が国の言語文化に親しみ,愛情をもって享受し,その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を育成するため,伝統文化に関する学習を重視することが必要とされているが,実際には古典の学習に抵抗を感じる生徒が少なくない。表現の難しさや,歴史的背景のイメージしにくさが,その要因と考えられる。他方中学校では,伝えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすることや,複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすることなどに課題があるとされる。考えの根拠を明確にして述べるために

は,見通しをもった段階的な指導が欠かせない。

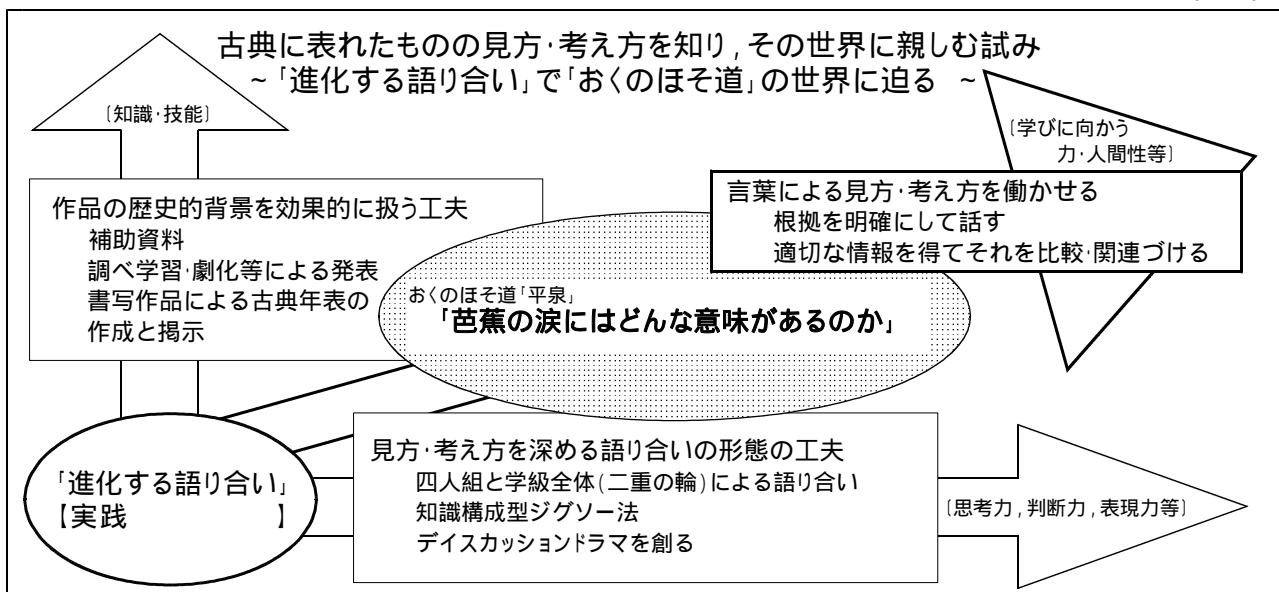
古典を含む「伝統的な言語文化」は〔知識及び技能〕の内容で,「自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすること」は〔思考力,判断力,表現力等〕の内容である。これらをつなげていくことは,国語科で求められる資質・能力の育成の鍵となる。

古典から古人のものの見方・考え方について読み取り,自分の考えをもち,根拠を明確にしながら語り合う言語活動には,大きな可能性を感じる。それによって,古典の世界に親しみながら,国語科の目標である「言葉による見方・考え方を働かせ,言語活動を通して国語で生活に理解,適切に表現する資質・能力」を育成していくことができるのではないかと考えて,この研究を進める。

研究の構想

1 研究構想図

(図1)



2 「おくのほそ道」について

本研究では,松尾芭蕉の「おくのほそ道」の「平泉」を教材とする。ここからは,この地を訪れる五百年前の歴史上の出来事や人物への芭蕉の思い,教養の深さや,文化を語り継いでいこうとする明確な意思などを読み取ることができる。古典の世界に親しみつつ,芭蕉のものの見方・考え方にふれ,自分自身の考えを深めて行く上で,格好の教材と言える。

3 「進化する語り合い」について

考えを深めていく上で 語り合う活動は欠かせない。古典学習に限らず,語り合いを積み重ねた学級では,生徒の思考力や表現力が高まり,経験を積む程に,語り合いが進化していることを実感している。

また,「おくのほそ道」の授業を何度も経験する中で,平泉で芭蕉が涙を流したことの意味を考えることが,芭蕉のものの見方・考え方を読み解く鍵になると

感じてきた。限られた授業時間内で、充実した語り合いが行われるように、様々な手立てを取り入れてきた。回数を重ねる度に、語り合うための手立ても更新されてきた。本研究では、このような二つの意味で、「進化する語り合い」をめざしていきたい。

4 作品の歴史的背景を効果的に扱う工夫について

古典の世界への興味・関心を高め、内容の理解を助けるため、授業では、様々な補助資料を使用した。関連する文献のコピー、年表や地図からスタートし、さらに適切な情報を簡単に得ることができるように、現地（平泉）を取材して自作した資料も取り入れた。さらに、古典の授業以外でも、歴史的背景を俯瞰できるような体験的活動や環境づくりを工夫した。

5 見方・考え方を深める語り合いの工夫について

四人組と学級全体「二重の輪」による語り合い

四人組での交流の後、柔らかい雰囲気での語り合いを意図した「二重の輪」の配置で学級全体の交流を行う。



知識構成型ジグソー法

「二重の輪」(図2)

共通する「問い」について、異なる資料を読み考えを深めたメンバーが、交流するものである。多様な見方・考え方もつ上で、効果的な手立てと言える。

ディスカッションドラマ

ディスカッションドラマ（討論劇）を創る活動は、主体性や協調性の評価を目的として大学入試等で実践されている。それぞれの立場からの考えを述べ、互いの考えの違いなどを基にして論じ合う討論を劇化する過程を通して、互いの立場や考えの違いや根拠の示し方についての考えを深めていくことが期待できる。

6 研究仮説

古典学習において、古典の歴史的背景を効果的に扱い、見方・考え方を深める語り合いの形態を工夫することで、古典に表れたものの見方・考え方を知り、その世界に親しむことができるのではないだろうか。

7 仮説の検証

授業中の生徒の反応、ワークシートへの記述と尺度への反応から検証を行う。

「進化する語り合い」実践の道のり

1 実践 「知識構成型ジグソー法」を導入して

生徒から出されたなぞをもとに、『時のうつるまで涙を落としはべりぬ』の『涙』には、どんな意味が

あるのだろうか。」という問いについて、語り合った。

(1) 「おくのほそ道」に関連する内容を発表する

総合的な学習で学区内の老人福祉施設を訪問して入所者に向けた発表を計画があった。



そこで「おくのほそ道」

の平泉の場面に関連する内容を寸劇の発表(図3)

調べて発表する活動を取り入れた。春望の世界の説明や、兼房の最期（義経記より）や平泉での芭蕉と曾良の行動の寸劇などを行った。観客を意識することで意欲的に活動に取り組むことができた。

(2) 複数の資料を用意する

知識構成型ジグソー法で用いる資料を四つ用意した。四チームに分かれ、それぞれが担当する資料を読み、芭蕉の涙の意味について語り合った。ここまでを1時間の活動とした。

| |
|---|
| 杜甫と源義経の生没、義経記成立を示す年表 源義経の生涯と義経記の概要 奥州藤原氏の系図 平泉町の地形 |
|---|

加えて、様々な視点で考えることを意図して「おくのほそ道」関連の複数の研究者による書籍の抜粋も配布した。

(2) 四人組～学級全体で語り合う

次の1時間に、前時の四チームから1名ずつで構成する四人組で、「自分の考え」を交流した。あくまで、チームの考えではなく、自分の考えを述べることを強調した。それぞれの四人組で、活発に語り合う姿が見られた。授業後半は、座席を「二重の輪」にシフトして、学級全体での交流を行った。

(3) 生徒の反応から

内容に関して

| |
|---|
| ・芭蕉は、杜甫の春望にとっても強い思いをもっていた。義経記を読んで実際に平泉に行ってみると、大門や秀衡の館はなくなっていたが、金鶏山や北上川はそのまま残っていた。それを見て心を打たれて涙した。さらに藤原氏三大の栄耀が思い出されて時代の流れを感じて、それが春望につながって、また涙した。 ・芭蕉は、義経記を読み、城の跡は残っていると思い、平泉に来たが、実際城の跡はなく、山や川といった自然だけが残っていて、ふと杜甫の詩を思い出し、九百～千年前のことが、どうして今も起きているのかと悲しくなり、涙を流したと思う。 |
|---|

語り合いについて

四人組(図4)

・涙の意味についてこんなに深く考えたことは、今までにはなかった。グループの話合いでは、全員が意見を出し合い、協力してたくさんの意見を結びつけたりして、すばらしかったと思う。自分の考えや友達の意見を語り合って、話し合いの能力の向上になったと思う。とても印象に残る授業だった。

・想像していたものと違う結論にたどりついたので、国語は奥が深いと思われた。また、この文章からそれだけのことを考えることができるのも、すごいと思った。今日の話し合いは、今までで一番できたと思う。



2 実践 「自作資料」を使用して

実践 では、用意した資料も多く、時間配分には課題が残った。そこで次の実践では、よりコンパクトに実践ができるように、配布資料と語り合いの時間配分を見直すこととした。

(1)四つの資料を用意する

次の四つの資料を用意した。一部を紹介する。

高館に昇った (自作)
平泉町巡回バスに乗って、「高館義経堂」停留所で下車すると、「高館義経堂駐車場」の看板。ゆるやかな坂道の先が「高館」。進むと、約20段の石の階段。登ると、教室3~4室ほどのスペースが。そしてそこには「夏草の碑」と「義経堂」があった。(後略)

二人は『義経記』を読んでいます (自作)
博士「香君。実は、芭蕉と曾良の二人が『義経記』を読んでいたと思われる重要な証拠があるんじゃないよ。」
香「博士。それは、なんですか。」
博士「それが、曾良の俳句『卯の花~』なんじゃないよ。」(略)
932年後に思い出す杜甫の漢詩「春望」
教科書の注にないいくつかの気になる語句について

(2)思考ツールの活用

四人組で語り合う場面で、四つの立場で考えてきたメンバーのそれぞれの考えを視覚的にまとめたり、つなげたりすることを意図して、思考ツールを使用した。

(3)実際の授業から

わかりやすさや親しみやすさを意図した資料の効果もあってか、語り合いを通して、ある程度核心に迫る発言を引き出すことはできた。ただし、実践 に比較して、各グループでの語り合いが、やや淡々と進んだ

印象が残った。福祉施設での発表も含め、学級全体が古典の世界に浸りきっていた実践 の学級とは、授業の質感がだいぶ違ったものとなっていた。

3 実践 「ディスカッションドラマ」を導入して
生徒が生き生きと語り合う姿を引き出すため実践では、「ディスカッションドラマ」の手法を導入した。

(1)四つの資料、四人組~学級全体の流れは同じ

今回も実践 と同じ四つの資料を用いた。四つチームに分かれてそれぞれの資料も参考にしつつ、「芭蕉の涙の意味」について考えるのも、前回同様である。大きな違いは、それぞれの立場のメンバーで四人組で、「芭蕉の涙の意味」についてのディスカッションドラマ(討論劇)を創ることである。

(2)ディスカッションドラマを創る

生徒は、まず実際に四人組で、「芭蕉の涙の意味」について、討論を行い、そこで出された発言をもとに劇化を進めていった。シナリオを書くことについては、強制しなかったが、多くのグループは、発言順やキーワードをメモする程度であり、一言一句シナリオにするものは見られなかった。

(3)ディスカッションドラマを発表する

次にそれぞれのディスカッションドラマの発表を行った。本当の討論といくつかの違いが見られた。

発言相互の関係がわかりやすい
考えの根拠がわかりやすい
全員が活躍している

本当の討論では、発言を聞いて自分の考えと比較することや、考えの根拠をどのように伝えるか考えるといった高度なことをリアルタイムで行わなくてはならない。全員が活躍するのは容易なことではない。ディスカッションドラマを創る過程では、それらの内容を仲間とともにゆっくりと考えることができる。そのことで、より多くの生徒が、根拠を明確にしながら自分の考えを述べることができたと思われる。話すこと・聞くことを鍛える上で、効果的な言語活動と言える。

(4)さらにリアルタイムの発言を

ディスカッションドラマの発表の後、さらに発言を促したところ、数名の生徒が発言した。芭蕉の涙に関しては、たった一つではない答えが考えられる。最後のドラマではない発言の中では、ここまで出された様々な視点からの意見を踏まえ、芭蕉のものの見方・考え方を理解した上で、芭蕉の涙の意味について、熱く語る生徒の姿には、圧倒された。

(5)生徒はこの活動をどう捉えたか

・普通のディスカッションよりも、ある程度知識が深まっている上でのディスカッションだったので、より一層考えが深まった。

・みんなの意見から、自分の考えを深めることができたと思う。芭蕉の人生や義経、人の命、そして自然、ものの考え方など、深くつなげて考えることができた。時間の流れとともに移ろっていくものは、今現在も、そしてこれからもあるってことを考えさせられた。

・ディスカッションドラマは、一人一人が考えたことをさらに深くする。いろんな考え方があっておもしろかった。その中でも、ものごとの共通点を見つけながら心情を探っていくと、自分も共感できる場面が多く、時代が変わっても、人はやっぱり人なんだなと思った。

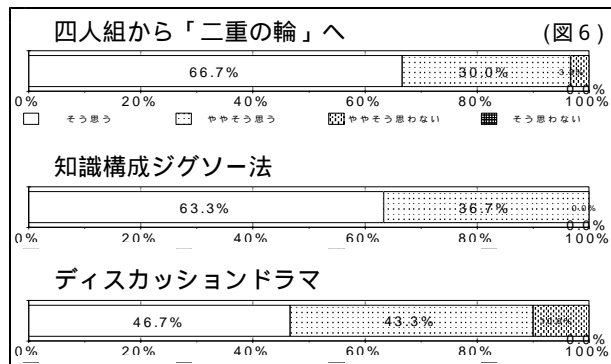
(6)歴史的背景を他の活動と結びつけて

書写の学習で、古典の冒頭部分や、短歌、俳句などを短冊状の用紙に書き、奈良時代から江戸時代の順番で廊下に掲示した。古典を俯瞰的に見ることができる有効な学習環境になったのではないかと考える。



4 語り合いの手立てへの評価 古典年表の掲示(図5)

語り合いの手立てが考えの深まりにつながるか、四段階尺度法で生徒に尋ねた結果が以下の通りである。



授業中の姿や振り返りなどからも、これらの手立てが、ある程度の効果を上げていることが実感できる。

考察と結び

1 四人組～「二重の輪(全体)」～振り返り(個別)

四人組では、自分の考えをもって参加することが交流の効果上げる。その後の学級全体の交流が、四人組での交流の意欲向上につながっているように見られる。また、「二重の輪」の座席配置に関して「みんな

が近く感じられる」「繭の中にいるような心地よさがある」といった生徒の声が聞かれた。すぐそばにいる級友の発言を聞いてさらに考えを深め語り合う上で、「二重の輪」は、効果的だったと考える。さらに、語り合いの後、「どんなことを学んだのか」と「どのように学んだか」の二つの視点で振り返ることで、内容の定着とともに、手段としての語り合いのよさが定着していったものと考えられる。

2 知識構成型ジグソー法

知識構成型ジグソー法では、四人組で語り合う前に、四つの資料を読む「エキスパート活動」を行い、その資料に関する専門家になることをめざす。そのことが、四人組での語り合いでの自信に満ちた姿につながっている。資料の準備に大変さはあるが、大変魅力的な方法であることが確認できた。

3 ディスカッションドラマ

今回、古典を語り合いで学ぶと同時に、語り合いそのものも学んできた。そのための手立てとして、ディスカッションドラマは、効果的だったことが、生徒の生き生きとした姿から確認できた。この活動に取り組む中で生徒は、よりよい討論とはどんな討論なのかということは何度も何度も考え直す。この活動を経験した生徒は、リアルタイムの討論でも、接続詞の使い方や根拠の示し方等発言方法の洗練を見せていた。

4 今後の課題

中学校国語教師として、秋に「芭蕉が涙を流す意味」を生徒に尋ねることは、密かな楽しみである。温故知新とも言えるその学びに、四人組と「二重の輪」、「知識構成型ジグソー法」、「ディスカッションドラマ」等、新しい手法をミックスしたのが、本研究である。今回感じたのは、新しい手法の中にも、何か人間的で普遍的なよさがあるということである。同時に、古典について語り合うことは、文化的実践に参加することであり、授業を通して文化を創造する生徒を育成しているのだという思いを新たにしたところである。

この春、タブレットが学校にきた。「知識構成型ジグソー法」の資料提示や「ディスカッションドラマ」のシナリオ執筆などはタブレットの得意分野と言える。古典の語り合いを進化させる余地はまだまだありそうだ。そこが、これからも続く大きな課題と言える。

参考文献 (1)文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編」2019年

(2)東京大学CoREF HP「知識構成型ジグソー法」2009年

(3)平田オリザ「22世紀を見る君たちへ」2020年

(4)角川書店「おくのほそ道」2001年

(5)岸田恋「義経記」1993年